
日本文学史概説

—— 近代編 ——

平岡敏夫・東郷克美編

有 精 堂

日本文学史概説 近代編

昭和五十四年二月二十日 初版発行 編者 平岡敏夫 東郷克美	発行者 山崎誠 東京都千代田区神田神保町一―三九	印刷所 株式会社文弘社 東京都千代田区飯田橋二―一四―一	発行所 有精堂出版株式会社 〒101 東京都千代田区神田神保町一―三九 電話 (二九一) 一五二―一三 振替口座 東京九―四〇六八四番
---	--	--	---

<検印省略>

3091-770316-8610

定価 ￥ 1600

は し が き

文学史の衰弱が言われてかなり久しいが、文学史の意識なくしては、個々の作家・作品を評価し、それらがあるべき場所へ位置づけるということは不可能である。文学史研究なくして文学研究はあり得ないといつても過言ではない。功罪・好悪を云々されつつも、各大学において、文学史の講義が必修とされているゆえんである。

文学史の講義には、その性格上、教科書が不可欠とも言えるが、日本近代文学史においても、私たちは適切な教科書にとほしいことに相当の不便を日ごろから感じて来た。さまざまな概説書があることはあるが、分冊形式のきわめて詳細なものであったり、手ごろな一冊であっても新味や個性味がとほしかったりするきらいがないとは言えない。コンパクトなものでありながらおもしろく、概説的でありながら個性的であるような、教授者・学生がその一冊をめぐって何かを言いたくなるような、使いやすく喚起的な教科書が何より望まれるのである。

本書は、教授者・学生の右のような要望を満たすべく努力したものであり、何よりも執筆者自身のそのような要望にもとづいて書かれた近代文学史教科書であると言つてよい。そのことは、本書がたんに文学史教科書の次元にとどまることなく、一個の新鮮な、魅力ある文学史叙述を目ざすものとなっているという事実にも及んでくるはずで、成果についてはむろん同学の方々の批判を受けなければならないが、大きな枠組みを設定し

つつ、そのなかで、執筆者が自身の主体的評価にもとづいて、自由にアクセントをつけ、個性的な叙述を試みようとしたことだけは事実である。

もとより、分担執筆である以上、ただ一つの文学史観で叙述されるというようなことはあり得ないが、そのことが、逆に個々の教授者・学生の「文学史」をさらに刺激することになり、文学史への挑発ともなり得るとするなら、編者にとって、これにまさるよろこびはないと言ってよいのである。

本書はだいたい次のような特色を持っていると考える。

一、大学・短期大学における近代文学史教科書として、明治初期から現代にまで及ぶコンパクトな一巻であること。

一、時期区分については、従来から支配的な明治・大正・昭和といった区分を受け入れながらも、そこに、近代の文化・文学にはかりがたい影響を与えてきた戦争（戦後）による区分をとり入れて、全十章に構成したこと。

一、小説・評論、詩歌、戯曲その他、といったジャンルによる三区分に従って叙述し、その時期における作家・作品を例文を引きつつ論じていること。

一、各章（各期）については、すべてのジャンルにわたって、ひとりの執筆者が担当し、全体的な位置づけをはかり、また他の章へも乗り入れ自由としたこと。

一、以上の結果、一度前の章で出た作家・作品は後の章で出てこないということはなくなり、編年体と列伝体が同時に生かされるようになっていくこと。

一、本文で取りあげてはいるものの、あまり詳述できない作者・作品・事項等については、適宜、頭注の方へまわして、本文の叙述の流れをスムーズにしたこと。

一、コンパクトな年表が付してあること。

一、詳細な索引を付して検索の便をはかったこと。

文学史叙述はもとより至難の業であり、このような小冊で実現されることはもとより僅かなものに過ぎないが、各章の執筆者の方々の意欲的な叙述が、本書の読者・使用者の文学史意識を喚起して、当初の意図を多少とも実現すべく、意義ある一卷となり得ることを切に願ってやまない。

昭和五十三年十二月一日

編 者

目次

第一章 明治初年代の文学

一 小説・評論

1 近世より近代へ

武士の文学と町人の文学——実用と快楽——分裂から統一へ

2 啓蒙思想と戯作文学

啓蒙思想家と明六社——福沢諭吉——中村正直と『西国立志編』——仮名垣魯文と戯作文学——その他の戯作者たち——『柳橋新誌』と漢戯文——大新聞と小新聞

3 政治小説と人情世態小説

『情海波瀾』と政治小説——翻訳物政治小説——『経国美談』とその小説性——『佳人之奇遇』とその小説性——政治小説と人情世態小説——『小説神髓』とその意義——『当世書生気質』の人情と写実

二 詩歌

初期詩歌——『新体詩抄』とその意義——『小学唱歌』など

三 戯曲その他

散切物と活歴物——黎明期の国文学

第二章 明治二十年代の文学二五

一 小説・評論二五

1 小説様式の開拓二五

『浮雲』と『舞姫』——言文一致体の試行——尾崎紅葉と硯友社——幸田露伴と斎藤
緑雨

2 新時代の動き三〇

翻訳文学の開花——女流の進出——政治小説の変質と大衆文学

3 文学認識の深化——批評・論争の季節三五

批評の舞台——新雑誌・新聞の誕生——近代文学批評の出發——「実」の立場と「想」
の立場

二 詩 歌三六

1 初期浪漫詩集の成立三九

『於母影』の実験——『楚囚之詩』『蓬萊曲』と『新体梅花詩集』

2 伝統詩歌再生への道四三

和歌改良論の進展——正岡子規の俳句革新運動

三 その他四五

文学史の試み——時代精神と庶民

第三章 日清戦後の文学四九

一 小説・評論 四九

1 時勢への対応 四九

日清戦争終結直後の状況——センセイショナリズムの小説——家庭と倫理とをめぐって

2 内面への沈潜 五五

自然の凝視とそれへの同化——ゾライズムと散文的描写と

3 反俗・超脱の文学 六〇

硯友社の圏外を立脚地として——樗牛の批評活動

二 詩 歌 六四

1 新派短歌の進展 六四

与謝野鉄幹と新詩社の『明星』——正岡子規と根岸短歌会

2 抒情詩の深化 六七

情意の詩的表現の定着と成熟——象徴主義的な詩作へ

三 戯 曲 七〇

史劇の試みから翻案・翻訳劇へ

第四章 日露戦後の文学 七三

一 小説・評論 七三

1 時代思潮の概観 七三

戦中から戦後へ

2 自然主義の確立と展開

七三

『破戒』とその位置——『蒲団』その自己革命性——花袋・藤村と「家」——独歩——都市下層庶民への注目——白鳥の虚無——徳田秋声——生まれつきの自然派——岩野泡鳴——主観の燃焼——自然主義批評の展開①——長谷川天溪——自然主義批評の展開②——島村抱月——自然主義批判の広がり

3 反自然主義の位相——鷗外と漱石——

八二

鷗外——その独特の闘いぶり——漱石——人間存在の認識者

4 荷風と潤一郎——耽美の系譜——

八七

通俗モラルへの反逆——荷風の輶晦——潤一郎——女性美への拝跪

二 詩

八九

歌

新体詩から近代詩へ——象徴詩の展開——口語自由詩への胎動——白秋と露風——近代短歌の成熟

三 戯曲その他

九三

近代戯曲の開花——文芸協会と自由劇場

第五章 大正前期の文学

九五

一 小説・評論

九五

1 『白樺』派

九五

明治から大正へ——武者小路実篤の人道主義——志賀直哉の初期から中期へ——有

目次

八

島武郎の出發——里見淳・長与善郎らの仕事

2 耽美派

永井荷風の屈折——谷崎潤一郎の悪魔主義——佐藤春夫その他

3 森鷗外と夏目漱石

森鷗外の歴史小説への転換——漱石後期の作品——漱石門下・教養派

4 自然主義

藤村と花袋の苦悩と成熟——秋声・泡鳴の展開——白鳥と秋江の仕事

5 『新思潮』派

大正の第二世代の登場——芥川龍之介の歴史小説——久米正雄その他の同人達

6 『奇蹟』派

「心」の重視——葛西善蔵の破滅型私小説

7 労働文学

『近代思想』

二 詩歌

高村光太郎——萩原朔太郎——室生犀星——大正前期の諸詩人——大正前期の歌壇

——大正前期の俳壇

三 戯曲

第六章 大正後期の文学

一 小説・評論

第七章 昭和初年代の文学

1	文壇のプルナス……………	一六
	「新進十家」「中堅十家」——芥川の鳥瞰……………	
2	成熟と分化……………	一〇
	人間主義——中堅の作家たち——既成の作家たち——その他の作家たち……………	
3	新しい時代の胎動……………	一〇
	プロレタリア文学と新感覚派文学……………	
二	詩……………	一三
	歌……………	
	詩壇——歌壇・俳壇……………	
三	戯曲その他……………	一五
	戯曲——「新しき村」と農場解放……………	
一	小説・評論……………	一四
	昭和文学の出版……………	
1	『文芸時代』廃刊と芥川の自殺……………	一四
2	プロレタリア文学……………	一三
	青野季吉から蔵原惟人へ——芸術大衆化論争——プロレタリア小説（昭2〜4）—— コップへの再組織——弾圧と解体……………	
3	近代芸術派の種々相……………	一八

目次

一〇

新感覚派の動向——新興芸術派と新社会派——正統芸術派——伊藤整と阿部知二

——小林秀雄の評論その他

4 既成作家の動向と「文芸復興」

自然主義的リアリズムの衰弱——同伴者作家——伝統回帰の文学——「文芸復興」

二 詩歌

『詩と詩論』とその分裂——プロレタリア詩とアナキズム詩——抒情派——短歌——俳句

三 戯曲

プロレタリア戯曲——岸田国士と『劇作』派

第八章 昭和十年代の文学

一 小説・評論

1 「文芸復興」と転向

開花と不毛の季節——ナルプ解体と文芸復興——『文学界』創刊の意味——行動主義とシェストフ的不安——転向文学の氾濫——村山知義と島木健作——中野重治の道——『日本浪漫派』と『人民文庫』——横光利一と小林秀雄——既成大家の復活——昭和作家の成熟——昭和十年代作家

2 戦争下の文学

日中戦争下の文学——太平洋戦争下の文学

二 詩歌

歌

一六〇

一六七

一六三

一六三

一六三

一五九

一五七

一五五

『四季』と『歷程』——戦争と詩人たち——短歌と俳句

三 戯曲

新劇運動の頂点——戦争下の新劇

第九章 太平洋戦後の文学

一 小説・評論

1 戦後第一期（昭和二十年～二十五年）

日本の敗戦と戦後文学——戦後民主主義文学運動の出發——『近代文学』の創刊と第一次戦後派作家——無頼派およびその他の作家たち

2 戦後第二期（昭和二十六年～三十年）

第二次戦後派の活躍と第三の新人の登場——大岡昇平・島尾敏雄・安部公房らの活躍——第三の新人たち——第一次戦後派作家の成熟

3 戦後第三期（昭和三十年～三十四年）

戦後世代の出現——石原慎太郎・大江健三郎・開高健の登場——女流作家の活躍など

二 詩歌

戦後詩の出發——『荒地』、『列島』の創刊——戦後叙情詩の展開——戦後短歌の流れ

三 戯曲

第十章 現代の文学

目次

一 小説・評論	三〇八
1 六十年代前期（昭和三十五年～三十九年）	三〇八
六〇年安保とその波紋——二つの文学論争——戦後派の浮沈——戦後文学継承派の台頭——女流作家の活躍——戦前作家その他	
2 六十年代後期（昭和四十年～四十四年）	三六
第三の新人と家庭小説——戦後派と長編小説——戦後文学継承派と教養派——新人の登場その他	
3 七十年代（昭和四十五年～五十三年）	三三
内向の世代の登場——新人の多様化——既成作家の収穫	
二 詩歌	三五
六十年代詩人の登場——『荒地』と『鰐』の世代——短歌と俳句	
三 戯曲	三七
木下順二と中堅作家——小説家・評論家の戯曲——新人の台頭	
近代文学史年表	三〇
索引	二四三
執筆者一覧	卷末

第一章 明治初年代の文学

一 小説・評論

1 近世より近代へ

武士の文学と 近世においては、文学は何よりも儒学を根幹とする修身齊家治国平天下を目ざす町人の文学 学問を意味しており、主としてそれは武士階級によって営まれたのであるが、一方、町人階級の文学としては、戯作の名のもとに一括される小説が、読者の感性にもっぱらはたらかけてその快楽的な要求を満たしていた。

道あれば文あり、道あらざれば文あらず、文と道とは理同じくして事異なり。道は文の本なり、文は道の末なり。末は少にして本は大なり、故に能く固し。

（『羅山先生文集』 原漢文）

江戸幕府の最高学府、昌平黌の祖である林羅山の文学観は右の一節にも明らかである。近世にあつては、文学とは窮極には道にかかわるべきものであり、漢学、なかんずく朱子学がその根本にあつたのである。「道とは朱子学で言う人倫まさに行うべきの理即ち道德をさし、文とは文章博学の意、この文の中には儒学からまだ独立を許されなかつた今日の意味の文学も含まれる」（中村幸彦「近世儒者の文学観」）。文学は道の実践であり、人間いかに生くべきかという根本課題は、明治以後の近代文学のなかにも深くひそんでいるのである。

「米八その菓を茶碗についでくんな。胸がどき／＼するからよねハはさしくして男「ヲヤそふか

○林羅山
天正一一―明暦三（一五九一―一六五五）
江戸前期の漢学者。朱子学を唱えて幕府の文官となり、林家官学の基礎を成した。

○為永春水

寛政二十一年保一四（一七五〇）
三。江戸後期の人情本作家。
代表作に『春色梅児誉美』その
続編『春色辰巳圖』等がある。
天保の改革で手鎖の刑を
受けた。

○洒落本

江戸後期の戯作の一種。対話を
主とし遊里での遊びを描く風
俗小説。代表作に丹波屋利兵
衛『遊子方言』等がある。

○滑稽本

洒落本の影響のもとに、都会
人の滑稽ぶりを対話中心に描
く。代表作に十辺舎一九
『東海道中膝栗毛』、式亭三馬
『浮世風呂』等がある。

○読本

江戸後期の戯作の一種。読む
ことを主としており、いく
んだ構成のものが多い。代表
作に滝沢馬琴『南総里見八犬
伝』等がある。

○北村透谷

明治元・明二七（一八六六）
詩人・評論家。『楚囚之詩』
『蓬萊曲』の長詩や『人生に
相渉るとは何の謂ぞ』『内部
生命論』等の評論がある。『明
治文学管見』は明治二十六年
発表。『日本文学史』が最初
の表題であった。

へどふせうねト、びっくりして薬を持来る「何サ何でもねへがトわらふこり「わりい事をしたね

トこれらこれらに「そりやアそふとアノお長はどふしたのふ「お長さんかエあの子も寢まどに苦勞し

ますヨ。それに鬼兵衛おにべいどんが、何かおかしいそふだから、猶心づかひしてゐるやうす

サ。随分わちきも側そばで氣を付けてゐますけれども、何をいふにもおまへはんのことを少ちとはかん

くつて居るこのかんくるとはすいりやうものだから実にしくふございませアな「そふサあれも幼ちひ

年中さいとからあのように育そだち合たから、かはひそふだヨトすこし「さよふサネ、おさな馴染なじみは格別

かわいゝそふだから、御尤ごようでございますヨトつんとする
（『春色梅児誉美』初編巻之二）

近世後期の小説（戯作）の代表的な作品『春色梅児誉美』（天保3〜4）の一節である。作者

為永春水はこの作によって人情本という様式を確立したが、それまでの洒落本・滑稽本・読本と

いった戯作の諸要素をとりこんで、男と女の人情、とくに芸妓とのそれを中心に描いたのが人情

本である。恋情のみでなく、凡人の凡情を描くというところもあって、人情本は近代の小説にひ

きつがれて行くのである。わけあって隠れ住む丹次郎の長屋を、なじみの芸者米八が尋ねあて

て、ひとときを過す場面であるが、いいなづけとして育ったお長を米八が嫉妬するところにも示

されているように、男女の人情が、こまやかに描き出されている。「わりい事をしたねへ」は、

その前に暗示されていた官能的な場面をさしているが、武士の文学としての儒学が否定した人間

の性的側面を、町人の文学としての戯作はとりあげたのである。

実用と快楽――北村透谷は、近世文学に「実用」と「快楽」の二大区分のあることを指摘して

分裂から統一へいる（『明治文学管見』）。前者は貴族文学、後者は平民文学とするが、むしろ武士